

として利用されたものである。17～24は第2面から出土した。17・18は土師器皿で、17は口径10.5cm、器高1.9cmを測る。にぶい黄橙色を呈する。18は、口径11.1cm、器高1.8cmを測る。浅黄色を呈する。19は石列5付近で出土した肥前の陶器皿である。復元ではあるが、口径14.8cm、器高1.8cmを測る。内面から腰あたりまで灰色系の釉薬が施される。露胎部は褐色を呈している。口縁端部は外反し、つまみ上げる。特徴から肥前陶器編年Ⅱ期17世紀前半のものであろう。20は瀬戸皿で、口径12.2cm、底部径6.4cm、器高2.9cmを測る。にぶい黄橙色を呈する。口縁端部は外反する。全体に内外面ともに釉薬がかかる。御深井系の製品と考え、17世紀ごろのものと思われる。21・22は石列5付近で出土した。21は瀬戸天目で、口径9.7cm、底部径3.7cm、器高6.1cmを測る。16世紀中ごろから17世紀のものである。22は黄瀬戸皿である。復元ではあるが、口径29.6cmを測る。端部は外反し、内側にたたみ、玉縁状になる。17世紀後半から18世紀のものであると考えられる。23は政和通寶である。24は信楽焼の擂鉢、18世紀前半のものである。

#### 4 総 括

今回の調査は、17～18世紀の城下町の一部を確認することができた。第2面では区画と思われる石列5を確認することができた。石列5は、現在の区画と比べるとやや南に位置している。現在の区画は、当時の区画を踏襲しつつ、若干移動しているようである。遺構は希薄であり、江戸時代の環境を詳細に確認することは出来なかった。しかし第1面と第2面の間に炭層を認められ、これは安永3年の火災を示唆する層位である可能性がある。また、石列5の北で建物と思われる礎石列4を確認した。区画石列5との距離が広く、現代の攪乱も認められることから、建物は半間程度南に広がる可能性がある。周辺での調査事例がないことから、当時の居住空間を確認できたことは、ひとつの成果といえる。

#### 参考資料・文献

- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』  
滋賀県立安土城考古博物館 2007 『城と城下町—彦根藩と膳所藩を中心に—』  
畠中英二 2003 「信楽焼の編年と年代環」『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版  
彦根市 2011 『新修彦根市史 第10巻 景観編』  
「彦根年代記一」